

# ギリシア語の現在分詞・アオリスト分詞の 男性単数主格形

松浦高志

## I はじめに

ギリシア語の能動態現在分詞・アオリスト分詞には *-οντ-* / *-ντ-* 語幹が用いられる\*1。男性単数主格形には *φέρων* (: *φέρω*) 「運びつつ」、*ίών* (: *είμι*) 「行きつつ」のように *-ων* に終わるものと、*τιθείς* (: *τίθημι*) 「置きつつ」、*διδούς* (: *δίδωμι*) 「与えつつ」、*ιστάς* (: *ίστημι*) 「立てつつ」、*δεικνύς* (: *δείκνυμι*) 「示しつつ」などのように「長母音+*-s*」に終わるものの2種類がある。どちらも規則的な変化形とは考えられないから、類推によるものと考えられるが、どのような類推がどのような順序で起こったかについては意見の一致を見ていないように思われる。

まず、*-ων* に終わるのは *-ον-* 語幹、たとえば *εὐδαίμων*, *εὐδαίμονος* (gen.) 「幸せな」のような単語からの類推と考えられる。*-ον-* 語幹の単数主格形、たとえば *τέκτων* 「建築家」の語末の *-ν* は、対応する古インド・アーリア語（いわゆるヴェーダ語とサンスクリット語）の *táksā* からわかるように、印欧祖語のある段階では失われていたと考えられる。この *-ν* はギリシア語の段階で復元されたと考えられるから、この類推はギリシア語の段階で起こったと考えられる。これはおそらくギリシア語の語末子音の消失（この場合では *\*-ont > \*-on*）が起こった後である。したがって印欧祖語ではもともと男性単数主格形は *\*-s* を用いない *\*-ont* であったと考えられる\*2。この類推が起こった原因が、男性単数主格形と中性単数主格形がどちらも *\*-ον* に終わってしまうのを避けるためであることは明らかである。

一方 *-ων* が *\*-ont-s* に由来すると考えられる場合もある。しかし *\*-ont-s (> \*-ovs)* ならばギリシア語では第2代償延長が起こって *\*-ovs* となるはずであるからそうとは考えられ

\* 脚注でそれぞれの箇所を示すことはしなかったが、特に全体的な論旨と内容について2名の査読者から数々の有益な指摘をいただいたことに感謝申し上げたい。もちろんそれでもなお誤りや不備が残っていれば、すべて私の責任である。

\*1 以下では中動態・受動態分詞や能動態完了分詞については論じないので、単に「分詞」と言った場合、すべて能動態現在分詞・アオリスト分詞を表すこととする。

\*2 Beekes, *Nominal*, 72.

ない。あるいは、いわゆる Szemerényi の法則により、印欧祖語の段階ですでに **\*-ont-s** > **\*-ōn** となっていたと考えられる場合がある。しかし古インド・アーリア語では同じ形が **-ān** に終わる。古インド・アーリア語で **\*-ōn** > **\*-on** という変化が起こる一方で、ギリシア語では起こらないと考えるのは難しい。したがって印欧祖語ではもともと **\*-ont** であったと考えられる\*<sup>3</sup>。

## 2 分詞語幹の母音交替

分詞語幹はギリシア祖語の段階では **\*-ont-** / **-nt-** だけであり、**\*-ent-** となることはなかったと考えられる。まず、*εἰμί*「……である」や *εἶμι*「行く」のような非語幹母音型 (athematic) の動詞でも **\*-ont-** が用いられる。また、名詞 *ὀδών*「歯」(< **\*h<sub>3</sub>d-ónt-**) は古インド・アーリア語の *dán* やラテン語の *dens* に対応し、*ἐκών*「自発的な」(< **\*uk-ónt-**) は古インド・アーリア語の *usánt-* に対応するが、これらは非語幹母音型の動詞の現在分詞に由来し、古形を保存していると考えられる\*<sup>4</sup>。ギリシア語以外でも、たとえばラテン語の *in-sons* (: *sum*)「潔白な」は形容詞に変化しているから古形が保存されていると言える。*prae-sens*「現存の」(< **\*h<sub>1</sub>s-ŋt-s**) のように一見 **\*-ent-** 語幹に由来すると思われるものが存在するが、ラテン語ではこの場合 **\*ŋ** > **en** となるから、**\*-nt-** に由来すると言える。

### 2.1 **\*-ent-** 語幹

男性単数主格形が *τιθείς* のように「長母音 + **-s**」に終わるものについては、分詞語幹の母音交替について検討する必要がある。まず、ギリシア語の方言には分詞語幹に **-ent-** を用いているもの、あるいは用いているように見えるものがあるが、方言での刷新であり、ギリシア祖語 (Proto-Greek) にはさかのぼり得ないと考えられる\*<sup>5</sup>。たとえばアルゴリス方言のうちのいくつかでは *εἶμι*「……である」の女性単数主格形が *έσσα* (= Att. *οὔσα*) となる。たとえば女性単数対格形の *έσσαν* (*IG* IV.757.B.21、トロイッゼーン出土、紀元前 146 年) がある。これは **\*éont-** > **ént-** のように母音消失 (hyphaeresis) が起こっているためと考えられる\*<sup>6</sup>。また、同じドーリス方言でも、たとえばキューレーネー方言においては同様の形は存在しないので、以上はいくつかの方言での刷新であると考えられる。カッリマコ

\*<sup>3</sup> Sihler, 615–616 は **\*-ōn** が印欧祖語の形とするが、そうではないと考えられる。

\*<sup>4</sup> Beekes, *Etymological*, s.vv.

\*<sup>5</sup> Rix, 234, Meier-Brügger, *Griechische*, ii.63 では非語幹母音型で用いられる **-ent-** が古い可能性が示唆されているが、Meier-Brügger, *Indogermanische*<sup>9</sup>, 318–319 にあるように、新しい形とするべきである。

\*<sup>6</sup> Nieto Izquierdo, 517–521; López Eire, 215. 母音消失については Lejeune, 251–253 を見よ。

スにある ἔσσαν (*Lav. Pall.* 69) は彼の母方言ではなく、この作品の舞台であるアルゴスの方言を反映したものと考えらるべきである\*7。したがって \*-ent- という分詞語幹はギリシア祖語にはさかのぼり得ない。またテッサリア方言の εἰντεσσι (: εἰμί, *SEG* 36.548) も新しい\*8。

## 2.2 弱語幹

ギリシア語では非語幹母音型で -οντ- / -ντ- の交替が見られるが、弱語幹の -ντ- が用いられる例は限られている。すなわち非語幹母音型で語根が子音で終わる動詞の女性形のみで用いられている。たとえばミュケーナイ・ギリシア語には (a-p)e-a-sa (: εἰμί, < \*h<sub>1</sub>s-nt-ih<sub>2</sub>, = Ion. ἀπ-εοῦσαι) が\*9、キューレーネ方言には κατ-ιασσα (< εἰμί, *SEG* 9.72.101), ἐκασσα (*SEG* 9.72.87. ただし -οντ- に由来する ἐκοισα [*SEG* 9.72.89] もある)、ἦσσαν (εἰμί の女性複数属格形, *SEG* 9.11.17) が\*10、クレータ方言には ἰαττα, ἰαθθα が\*11、アルカディア方言には ἐασας (女性複数対格形) がある\*12。また辞典にも γεκαθά· ἐκούσα (Hsch.) があり、これはクレータ方言の φεκαθθα (= Att. ἐκούσα) を表していると考えられる\*13。

## 3 長母音語根の動詞

ギリシア語では、いわゆる長母音語根の動詞では分詞語幹に \*-ont- が用いられていない。たとえば τιθείς < \*τιθεις, διδούς < \*διδωνς, ἰστάς < \*ἰστανς である。その説明には次のようなものがあつた。まず、これらの動詞では分詞語幹に零階梯の \*-nt- を用い、Osthoff の法則により長母音が短くなるというものである。たとえばアオリストの \*d<sup>h</sup>ē-nt- > θέντ- 「置きつつ」のような場合である。しかし Osthoff の法則が作用するのは一般に語末の \*-VRC という音素の組み合わせの場合であるから、単数主格形での語幹の形が類推によりほかの格形に広がったということになる。類推の起こりやすさで言えば逆の方が起こりやすいから、この説明には無理があると言える。次に、Hoffmann が言うように分詞語幹にもともと \*-ent- が存在し、これらの動詞では \*-ont- ではなくて \*-ent- の方が用いられたと

\*7 Dobias-Lalou, 135 n. 34.

\*8 Morpurgo Davies, 163–165 はドーリス方言では διδοντι: διδόντες = ἐντί: x より x = ἔντες、あるいはテッサリア方言では φιλέντι: φιλέντες = ἐντί: x より x = ἔντες という類推から説明しているが、あるいは López Eire, 214 の説明するように、母音消失によるものかもしれない。

\*9 Bartoněk, 339; Aura Jorro, s.v. a-pe-e-si.

\*10 Dobias-Lalou, 135–136.

\*11 Bile, 243.

\*12 Dubois, i.74, iii.26 n. 466.

\*13 Risch, „Verbalparadigmas“, 324, Beekes, *Etymological*, s.v. ἐκών.

いうものである\*<sup>14</sup>。たとえば \*<sup>dh</sup>h<sub>1</sub>-ént- > θέντ-, \*sth<sub>2</sub>-ént- > στάντ- 「立ちつつ」、\*dh<sub>3</sub>-ént- > δόντ- 「与えつつ」である\*<sup>15</sup>。しかし第2節で見たように \*-ent- 語幹の痕跡は認められないし、またいわゆる長母音語根の動詞にしか用いられないので、むしろ類推によるものと考えた方がよいと考えられる。たとえばもともと \*<sup>dh</sup>h<sub>1</sub>-ónt- > \*θόντ- であったのが τίθη-μι / τίθε-μεν などからの類推により θέντ- になったと考えた方がよいと考えられる\*<sup>16</sup>。しかしそれでも不十分である。男性単数主格形は \*θέντ-s > θείς となるが、これは一般に語幹に -εντ- を用いる形容詞、たとえば χαρί-εις, χαρί-εντ-ος (gen.) 「魅力的な」のような単語からの類推と説明される。しかしたとえば δίδωμι 「与える」の現在分詞の語幹は -οντ- を含むから、これは \*-ων になる方が自然であると考えられる。

この問題は古インド・アーリア語の現在時称の第3類（重複類）と比較することで解決されると考えられる。たとえば τιθεντ- 「置きつつ」は古インド・アーリア語の dádhāt- < \*<sup>dh</sup>ed<sup>h</sup>h<sub>1</sub>-ǵt- に、ίσταντ- 「立てつつ」は tíṣṭhat- < \*stisth<sub>2</sub>-ǵt- に、διδοντ- 「与えつつ」は dádat- < \*dedh<sub>3</sub>-ǵt- に対応し、古インド・アーリア語では現在分詞の語幹として零階梯の \*-nt- をすべての性・数・格で一貫して用いる。これらにおいて、ギリシア語と古インド・アーリア語の形は対応しない。古インド・アーリア語でこれらの語幹が常に \*-nt- であるのは一般に刷新であると考えられている\*<sup>17</sup>。しかし古インド・アーリア語が本来の形を保存していると考えた方がよいと考えられる。まず、Rix, 234 (§256.b) はシーグマ型アオリストについて、\*<sup>dh</sup>ég<sup>wh</sup>-s-ǵt-s > Ved. dhákṣat (N. sg. m.) 「焼きつつ」、\*<sup>dh</sup>ég<sup>wh</sup>-s-ǵt-os > dhákṣatas (G. sg. m.) の例から、アクセントが常に語根に置かれ、分詞語幹に一貫して \*-nt- が用いられる形を想定している\*<sup>18</sup>。第3類（重複類）では、常に重複音節にアクセントが置かれると考えられるから\*<sup>19</sup>、シーグマ型アオリストと同様に分詞語幹は常に \*-nt- であると考えられる。さらに、男性単数主格では \*-s が容易に付され得ると考えられる。これについてはラテン語の例が特徴的である。ラテン語では現在分詞の中性単数主格形が -ns (< \*-nt-s) で終わり、男性形と同じであるが、これはラテン語の曲用体系の中では例外的である。これは \*-s が付される前から男性形も中性形も同じ \*-nt で終わっていたと考えれば説明できると考えられる\*<sup>20</sup>。古インド・アーリア語の現在時称の第3類（重複類）ではラ

\*<sup>14</sup> Hoffmann, 4 n. 3.

\*<sup>15</sup> 以上については Bammesberger, 286 が簡潔にまとめている。

\*<sup>16</sup> Bammesberger, 289–291.

\*<sup>17</sup> Sihler, 616; Bammesberger, 287 n. 3.

\*<sup>18</sup> ὁμοοατα (< \*-s-ǵt-ṛ) 「誓いを立てた彼を」(ICret. IV.72.IX.38–39) は、もし ὁμοοα(ν)τα の誤記でなければ古い形を保持していると言える。

\*<sup>19</sup> Macdonell, 190–191.

\*<sup>20</sup> Beekes, *Nominal*, 66; Beekes, *Introduction*<sup>2</sup>, 197.

テン語と同様に一貫して \*-nt- を用いるから、\*-s が付されていたと考えることができる。

したがって  $\tau\acute{\iota}\theta\eta\mu\iota$  (< \* $d^h e h_1 r$ -) について考えると、印欧祖語では男性単数主格形が \* $d^h e d^h h_1 r\text{-}nt\text{-}s$  であり、ギリシア祖語では \* $t^h i t^h a t s$  であった可能性がある。この形は不規則なのでまず  $\tau\acute{\iota}\text{-}\theta\eta\text{-}\mu\iota$  /  $\tau\acute{\iota}\text{-}\theta\epsilon\text{-}\mu\epsilon\nu$  のような母音交替の型より、\*a が \*e に置き換えられ、分詞語幹であることを示すために \*n が挿入されて \* $t^h i t^h e n t s$  >  $\tau\iota\theta\epsilon\acute{\iota}s$  のようになったと考えられる\*21。アクセントは  $\acute{\iota}\omega\nu$  などからの類推であろう。

## 4 結論

したがって以上をまとめると次のようになる。印欧祖語では、現在分詞とアオリスト分詞では語幹に \*-ont- / -nt- が用いられていた。また、非語幹母音型の動詞のうち、いわゆる長母音語根をもち現在で重複を行う動詞では、現在分詞の語幹には一貫して \*-nt- が用いられ、男性単数主格形では \*-s が付されていた。この後ギリシア語では、語幹母音型などでは男性単数主格形が -ov- 幹からの類推で \*-ov となった。ギリシア語では、いわゆる長母音語根をもち現在で重複を行う動詞では  $\tau\iota\theta\eta\text{-}$  /  $\tau\iota\theta\epsilon\text{-}$  のような、異なる長さの同じ音による母音交替の型ができていたが、現在分詞ではたとえば \* $\tau\acute{\iota}\theta a t s$  というわかりにくい形になってしまっていた。このわかりにくさは類推により語幹の \*a を  $\epsilon$  で置き換え、さらに  $\nu$  も復元して  $\tau\iota\theta\acute{\epsilon}\nu t\text{-}$  とすることにより解消された。男性単数主格形はしたがって \* $\tau\iota\theta\acute{\epsilon}\nu t s$  >  $\tau\iota\theta\epsilon\acute{\iota}s$  となった\*22。

(東京大学)

## 参考文献

- Aura Jorro, F. (red.), *Diccionario Micénico* (Madrid, 1985–93).  
 Bammesberger, A., „Das -nt-Partizip bei athematischen Verbalstämmen im Griechischen“, *ZVS* 95 (1981), 286–292.  
 Bartoněk, A., *Handbuch des mykenischen Griechisch* (Heidelberg, 2003).  
 Beekes, R. S. P., *The Origins of the Indo-European Nominal Inflection* (Innsbruck, 1985).  
 — *Etymological Dictionary of Greek* (Leiden, 2010).  
 — *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*<sup>2</sup>, rev. M. de Vaan (Amsterdam, 2011).

\*21 今まで調べてきたように、 $\tau\iota\theta\epsilon\acute{\iota}s$  のような分詞では、このような類推による変化を考えなければ説明が不可能である。たとえば Sihler, 617 を参照のこと。

\*22 これは重複を行わないものも含めた長母音語根をもつ動詞全般に広がり、 $\nu\acute{\omega}\mu\iota$  動詞や第 I アオリスト分詞にも広がったと考えられる。

- Bile, M., *Le dialecte crétois ancien* (Paris, 1988).
- Dobias-Lalou, C., *Le dialecte des inscriptions grecques de Cyrène* (Paris, 2000).
- Dubois, L., *Recherches sur le dialecte arcadien* (Louvain-la-Neuve, 1988).
- Hoffmann, K., „Vedisch *vidh*, *vindh*“, *Sprache* 15 (1969), 1–7.
- Lejeune, M., *Phonétique historique du mycénien et du grec ancien* (Paris, 1972).
- Liddell, H. G., Scott, R., and Jones, H. S. (eds), *A Greek-English Lexicon*<sup>9</sup> (Oxford, 1940).
- López Eire, A., « A propos de l’attaque *ὦν*, *οῦσα*, *ὄν* », *Glotta* 64 (1986), 213–216.
- Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg, 1910).
- Meier-Brügger, M., *Griechische Sprachwissenschaft* (Berlin, 1992).
- *Indogermanische Sprachwissenschaft*<sup>9</sup> (Berlin, 2010).
- Monier-Williams, M. (ed.), *A Sanskrit-English Dictionary*<sup>2</sup> (Oxford, 1899).
- Morpurgo Davies, A., “Thessalian *εἴντεσσι* and the Participle of the Verb “to be””, in *Étrennes de septantaine. Travaux de linguistique et de grammaire comparée offerts à Michel Lejeune par un groupe de ses élèves* (Paris, 1978), 157–166.
- Nieto Izquierdo, E., *Gramática de las inscripciones de la Argólida* (Madrid, 2008).
- Risch, E., *Wortbildung der homerischen Sprache*<sup>2</sup> (Berlin, 1974).
- „Ein Problem des griechischen Verbalparadigmas: Die verschiedenen Formen der 3. Person Plural“, in J. Tischler (Hg.), *Serta Indogermanica. Festschrift für Günter Neumann zum 60. Geburtstag* (Innsbruck, 1982).
- Rix, H., *Historische Grammatik des Griechischen* (Darmstadt, 1976).
- Schwyzler, E., *Griechische Grammatik* (München, 1939).
- Sihler, A. L., *New Comparative Grammar of Greek and Latin* (Oxford, 1995).